

論文内容要旨

論文題名：COPDセルフ・エフィカシースケール日本語版の作成及び信頼性と妥当性の検討

専攻領域名：内部障害リハビリテーション領域

氏名：鶴田かおり

【背景】慢性閉塞性肺疾患（COPD）は、疾患の進行を予防し増悪を防ぐ必要があり患者への自己管理教育が強化されている。セルフ・エフィカシーとは、ある行動を起こす前に個人が感じる「自分に出来るという感覚や自信」のことである。セルフ・エフィカシーは、自己管理教育に重要であると述べられており、Wigalらは、COPD患者の自己効力感を評価するために全34項目 The COPD Self efficacy scale(CSES)を開発している。日本にはCOPDに特異的なセルフ・エフィカシーを評価するスケールが存在していない。本研究ではCOPDセルフ・エフィカシースケール日本語版を作成することとした。【方法】2019年1月30日～4月17日の期間中、昭和大学病院呼吸器アレルギー内科に通院中のCOPD患者の内、本研究への参加について本人から文書により同意が得られた患者95例を対象とした。COPDセルフ・エフィカシースケール日本語版、一般性セルフ・エフィカシースケール、HADS(Hospital Anxiety and Depression Scale)、主観的幸福感、基本チェックリストを自記式（自記式が困難な場合は他記式）で調査を行い、診療録から呼吸機能検査、GOLD分類を抽出した。信頼性、妥当性（収束的妥当性、弁別的妥当性、因子妥当性）の検討を実施した。有意水準は全て5%未満とした。【結果】信頼性の検討については、Cronbachの信頼係数 α は0.98であった。収束的妥当性については、COPDセルフ・エフィカシースケール日本語版合計点と5つの下位尺度は、一般性セルフ・エフィカシースケール合計点、主観的幸福感の下位尺度の自信と達成感との間に弱い～中等度の正の相関を示した。HADS合計点と基本チェックリスト総得点との間に弱い負の相関と中等度の負の相関を示した。基本チェックリスト下位尺度である日常生活関連動作、認知機能、抑うつ気分との間に弱い負の相関を示した。基本チェックリスト下位尺度である低栄養、口腔機能、主観的幸福感の下位尺度である満足感との間には有意な相関は認められなかった。因子妥当性については、第4因子まで有効であることを示し、KMO測度は0.93で、バートレットの球面性検定は $p<.01$ であった。【考察】信頼性に関しては、良好な内的整合性が確認された。COPDセルフ・エフィカシースケール日本語版合計点と下位尺度と種々のアンケートとの相関結果より、妥当性が確認された。因子構造がCSESと異なっていたが、参加者の平均年齢が高いことや、男性の占める割合が高いこと、軽症例が多いことなど、対象者の特性や文化の違いが原因であった可能性が考えられる。【結語】本研究にて、COPDセルフ・エフィカシースケール日本語版を作成し、検証の結果、信頼性と妥当性が認められた。